

ベトナム人日本語学習者に対する音声学の試み —正の転移を使った foot リズム教授—

坂田 恒

Khoa Ngôn ngữ và Văn hoá phương Đông, Trường Đại học Ngoại ngữ-Tin học TP.HCM

hisashi@huflit.edu.vn

TÓM TẮT— Chỉ số PVI (Pairwise Variability Index) trong tiếng Nhật và tiếng Việt khá gần nhau. Đồng thời, rất nhiều từ Hán Việt trong tiếng Việt đều được cấu tạo từ 2 âm tiết, điểm này rất giống với cấu tạo âm tiết (Mora) trong từ vựng tiếng Nhật. Bài báo này tập trung vào việc phân tích chuyển di ngôn ngữ tích cực (positive transfer) và nhịp điệu (rhythm) trong tiếng Nhật và tiếng Việt, từ đó giới thiệu phương pháp giảng dạy ngữ âm tiếng Nhật phù hợp cho người Việt Nam học tiếng Nhật.

Từ khóa— Giảng dạy tiếng Nhật, nhịp điệu, chuyển di ngôn ngữ, âm tiết.

I. はじめに

ベトナムにおいて日本人講師に求められているものとして「発音の向上」が全体として最も多い割合を占めている [4]。母語にない外国語の音声は知覚の範囲外であるので、第二言語の音声の習得を独学で行う事は困難を伴うと考えられ、音声指導について考えることは、ベトナムにおける日本人日本語講師にとって必須であろう。

多くの日本語学習者は、その学習動機を「就職や職場での有利な待 [12]」を目的としている。また日本語の発音の良し悪しも、一般的に日本語能力の判断基準になっていると思われ、軽視できない。それに関わらず、音声教育に関しては指導法が確立されていない [7]。ベトナム語話者に対しては、なおのことであろう。本稿では坂田 (2022) に引き続きベトナム人日本語学習者に対する日本語音声指導を考察する。具体的にはベトナム語の音声リズムを日本語のフットリズムの音声指導に応用するという新しい試みの実践を分析する。

II. 問題と目的

2020 年初期頃から始まった COVID-19 の流行の影響で、世界的に日本語学習者が減少した [13]。しかし相対的な日本の魅力の低下が叫ばれて久しく、今日では数十年ぶりの水準での円安など顕著である。だからこそ、短期間で最大限の学習効果を目指し、学習者が日本語能力の向上を実感することは学習意欲を持続させ、今後の日本語学習者の維持や増加、そして将来の日越の懸け橋となる人材を育てるために重要であろう。そのための手段の一つとして、学習者の母語であるベトナム語を最大限に活用し、その正の転移を持って日本語の習得を助ける方法を本稿では提唱し、その学習効果と学習者の体験をデータ化する。

日本で行われる多くの日本語教育の現場では、教室内に複数の異なる母語の学習者がいることもあってか、直接法が注目された時期が長かったようである。また、ベトナムでも日本人講師に日本語のみを使った教授を期待される事も多い。そのような事情から、学習者の母語を積極的に活用した教授の方法はあまり提唱されてこなかった。例えば数少ない音声指導に関する先行研究の多くは、池田 (2008) や Ngan (2015) のように双方の言語の比較や母語からの転移という視点に欠けている。勿論指導側にも、発音の複雑さから習得が困難なベトナム語の知識や能力が必要であることも 1 つの要因であると考えられる。

畠山 (2012) [4] が行ったアンケート調査によると、ベトナムにおける日本人講師の必要性として「発音の向上」が全体で最も多い割合を占めている。石田 (2018) は、「長期的に日本語母語話者の発音を聞いても学習者の発音が向上しないことがほとんどであろう」と述べており [5]、Abercrombie (1961) も、「音声リズムは、母語と目標言語のリズムの違いを聞いて分析し、そして練習しなければ、その習得の成功の可能性は低い」と述べている [1]。これらのことから「聞く」だけでは不十分であり、前述した様に先ずは外国語の音やリズムの違いを意識する必要がある。日本人日本語教師の必要性、または重要な役割として、その違いの意識化を促し、それらの認識を助けるということがあるのではないだろうか。

人間は、生まれてから「6 か月頃になると」第一言語「特有の母語の知覚ができるようになり、9 か月頃には言語特有の音の組み合わせがわかってくる。そうになると、外国語の子音を弁別すること」が出来なくなる [6]。つまり、子どものことばの発達は、まず音から始まり、母語の音韻の心的表象形成が行われ、同時に自分の言語以外の音に対する感受性は失われてしまうということである。具体的には、日本人であれば「乳児の段階で、英語の /r/ と /l/ の区別」は必要でなくなり、韓国語が母語であれば「清音と濁音」

の区別は必要でなくなり、出来なくなる [6]。このように、第二言語の音声の習得を独学で行う事はとても困難を伴い、学習者自身の知覚の範囲外である外国語の音声の正誤を自身で判断することは難しい。音声リズムも例外ではないはずである。よって日本語学習者に対する音声指導が必要であると考えられる。しかし、日本語教育全体を見ても音声教育に関しては指導法が確立されていない [7] のが現状であり、ベトナム人日本語学習者に特化したものはなおさらである。

ベトナムにおいて日系企業や日本企業、またはそれらをビジネスパートナーとする企業への「就職や職場での有利な待遇を目的とする日本語学習者が増加して [14]」おり、これは大学生においても例外ではないであろう。そのような企業の採用面接において、日本語の発音の正確さや自然さは短時間で就職希望者の日本語能力を知るための大きな基準であると考えられ、採否の重要な判断材料になっていると思われる。

このような理由から、本稿ではベトナム語の音声リズムやその特徴を活用し、新しい視点からベトナム人日本語学習者への日本語のフットのリズムを教授する方法を提議していく。

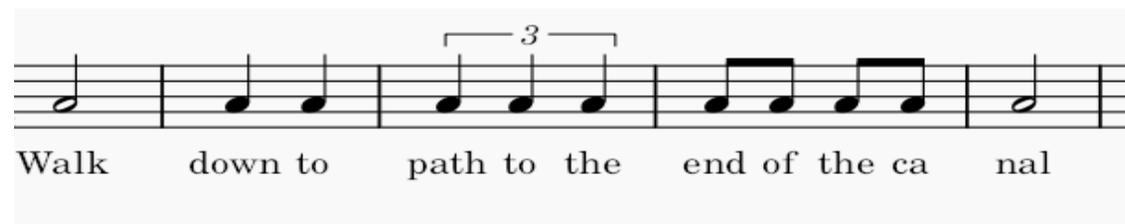
III. ベトナム人日本語学習者に対する日本語音声リズム指導法についての仮説

日本語は拍リズムに分類されており、拍リズムは音節リズムの下位に属しているとされている。しかし、日本語の特殊拍を除けば日本語もベトナム語と同じ音節リズムの言語であると言える。さらには両言語の PVI の値も近似している [2]。よってベトナム人日本語学習者が母語の知識や感覚を生かし日本語音声リズムの習得に役立てることは可能なはずである。モーラ (mora・拍) に加え、フット (foot) という音声リズムの単位もある。フットとは、音韻的な長さの単位としてのモーラという概念であり、日本語の場合 2 モーラを一つのまとまりとし、それが 1 フットとして扱われている [9]。

《日本語におけるフットの例 1》

おは・よう・ござ・いま・す口

フットの視点から、強勢拍リズムの英語と日本語を比較した際に、以下のように日本語は比較的単純なリズムであると言える。



〔図 1〕 英

語におけるフットの例【出典】大高、神谷 (2013) [8] に基づき坂田作成



〔図 2〕 日本語におけるフットの例 2

ベトナム語は漢字由来の単語が語彙の 7 割を占めていると言われており、漢字由来の単語は 2 音節で構成されるという特徴がある。共通の漢字由来の語彙も多く存在するが日本語では 3 拍以上で発音されるものも、以下のようにベトナム語では多くの場合 2 音節で発音されることが多い。

〈共通の漢字由来のベトナム語と日本語の語彙の例〉

文化 (2 音節/3 モーラ) Văn hoá (2 音節)

日本 (2 音節/3 モーラ) Nhật Bản (2 音節)

電話 (2 音節/3 モーラ) Điện thoại (2 音節)

ベトナム[越南] (2 音節/4 モーラ) Việt Nam (2 音節)

物理(2音節/3モーラ) Vật lý (2音節)
 理由(2音節/3モーラ) Lý do (2音節)
 科学(2音節/3モーラ) Khoa học (2音節)
 学生(2音節/4モーラ) Học sinh (2音節)

現在のベトナム語の正式な表記法で、ローマ字が用いられる Quốc Ngữ は音節ごとに間隔を分けて表記される。これは Quốc Ngữ を考案したポルトガル人宣教師らに「日本人が各単語を、漢字や字喃の分節に基づき分解しその語義 [10]」を解説した影響であると言われている。これらを発音する際、以下のように単語を一つのまとまりとして区切ることができる。

Cộng hòa | Xã hội | chủ nghĩa | Việt Nam | (ベトナム社会主義共和国)
 共 和 社 会 主 義 越 南

これは二つの漢字がくっつき意味をなす漢字の特徴からくるものであると考えられる。Phí cơ [飛機] と Máy bay のように漢語から純ベトナム語に置き換えられた言葉も多くあり漢語に由来しない多くの言葉も二つのまとまりをなすことも多い。このことを日本語のフットに応用し、音声リズムの教授に活用できるはずであるというのが本稿の仮説である。例えば以下のとおりである。

おは | よう | ござ | いま | す | (5フット)
 Ngáy mai | chúng tôi | đi dạo | thành phố | Hà Nội

また、日本語にはフットの他にも「長音節」と「短音節」という考え方もあり、それに対しても以下のように応用が利く。

あり | が | とう |
 Nhật Bản | và | Việt Nam

IV. 音声指導と調査

前述の仮説を元にホーチミン市内の A 大学と B 大学（共に 2 年生）で日本語を学ぶ日本語学習者 166 名を対象に調査を行った。調査対象の全員が 2 年生という事もあり学習者の約 9 割が 1 年以上 3 年未満の日本語学習歴であった。上記の音声指導を行う前にスマートフォンにて発音を録音してもらい収集した。次に上記の方法に沿ってフットの指導を 15 分程度行いその後、もう一度発音を録音してもらい、その後アンケートに答えてもらった。指導に使用した例文は以下の通りである。

1. はじめまして (3フット)
2. りんごを買います (4フット)
3. 料理をしてください (5フット)
4. マンゴージュースを飲みます (6フット)
5. わたしはベトナムから来ました (7フット)

上記のそれぞれの文にフットリズムに対応させたベトナム語の文は以下の通りである。

1. Con mèo đang trèo cây cao
2. Hỏi thăm chú chuột đi đâu vắng nhà
3. Ngày mai chúng tôi đi dạo thành phố Hà Nội
4. Ngồi nhà trong ngô sum suê tán cây bông giấy trước hiên
5. Mẹ tôi biết làm trà sữa trân châu đường đen rất ngon

時間的な制約もありフットや音節、モーラなどの専門用語を使わず、それらの説明も行わず、あくまでベトナム語の音声リズムの感覚を日本語に転移させる説明・指導を心がけた。事前に以下のような基本属性に関する項目に回答してもらった。

- ① 氏名／年齢／学校名 tên/ tuổi/ tên của trường

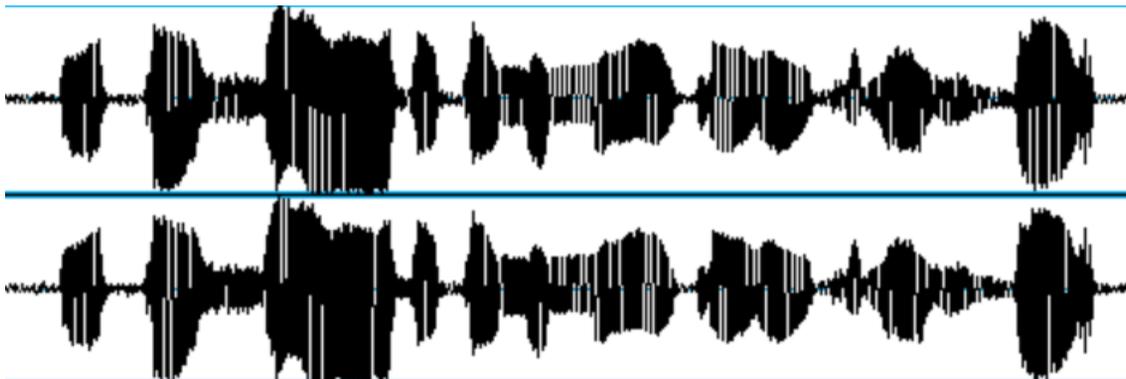
- ② 性別 giới tính
- ③ 日本語学習歴 đã học tiếng Nhật bao lâu
- ④ 出身地 quê quán
- ⑤ 高校名（出身がホーチミン市の場合）
tên trường cấp 3 (nếu đến từ TP HCM)
- ⑥ 日本語学習の目的 mục đích học tiếng Nhật

その他に日本語の知識や学習方法についての質問項目を設けた。加えて「日本語の発音で苦労している事、難しいこと、わからないことなどあれば自由に書いてください nếu có gì khó khăn hay là khó hiểu về phát âm tiếng Nhật thì cho tôi biết」という項目を設けた。

V. 調査結果・検証

畠山(2012)にもあるように、正しい発音の習得方法が知りたいといった回答が多く見られたが、アクセントに関するものが多かった。あまり音声リズムについて意識されていないようである。しかし、アクセントは方言によって差異があるものの、リズムに関してはその差異が少ない。よって、発音においてリズムは重要な要素であるといえ、そこを意識させることは、その後の学習の大きな助けになるはずである。また、日本語の学習目的は「仕事を探すため」「高給を得るため」「日本で働くため」等の仕事に関係する回答が見られた。

実際の音声は以下のとおりである。紙幅の関係上、全てを紹介することはできないが、以下の図3と図4で音声指導前と指導後の録音の一例を挙げる。尚、同一人物の録音である。



〔図3〕 「私はベトナムから来ました」録音 指導前



〔図4〕 「私はベトナムから来ました」録音 指導後

このように、音声指導後ではフットのまとまりが意識されて発話されているのがわかる。他の多くの学生でも同様の傾向が見られた。

また、多くの学習者において、フットリズムを意識していない時は「ます」でベトナム語の鋭い声調 (sách) のように発音されていたが、フットを意識した場合はアクセントなしで発音されていた。フットリズムの訓練がアクセントの習得に及ぼす影響があるようである。

VI. まとめ

今回の調査を通してベトナム語の音声リズムを活用して日本語のフットリズムを指導することは一定の効果が期待でき、また学生からも一定の興味と評価を得られた。また正の転移を活用するという事は、帰納的学習を促すことができ、学習効果も期待できると考える。

しかし今回、調査対象に大きく偏りがあり、また対象人数も限られていた。そのため小さくないバイアスがかかっていたことは否めない。加えて日本語のフットリズムに対応したベトナム語がどれだけ学習者の理解を助けたかについては、それらを活用せずに指導した場合との比較をしていないため、実際にどこまでベトナム語を活用することに効果があったかについては明らかにできなかった。回答してもらった基本属性と学習効果の関連性についても同様である。これらの点を今後の課題としたい。

また音声指導全体でいえば、日本語のアクセント、つまり高低アクセントについて勉強したいという声も多かった。フットリズムを意識して発音することにより、ベトナム語からの負の転移による誤ったアクセントの傾向の改善がみられた。ここから、ベトナム話者における日本語の発音では、音声リズムと高低アクセントは影響し合う関係であると考えられる。それらも今後明らかにしていきたい。

VII. TÀI LIỆU THAM KHẢO

- [1] Abercrombie, D. (1967) *Elements of general phonetics*: Edinburgh University Press
- [2] Yanin Sawanakunanon (2013) *Segment timing in certain Austroasiatic languages: implications for typological classification*
(https://www.researchgate.net/publication/259705595_Segment_timing_in_certain_Austroasiatic_languages_implications_for_typological_classification) 2022/7/6 閲覧
- [3] 荒川洋平 (2009) 『日本語という外国語』 講談社 2009 年
- [4] 畠山浩子 (2012) 「ベトナムで期待される日本人日本語教師像 : 日本語学科在籍学生へのアンケート調査から」 『言語・地域文化研究』 (18) 東京外国語大学大学院 2012 年 pp101-119
- [5] 石田三智 (2018) 「ヴェルボ・トナル法を応用したベトナム人のためのプロソディ指導」 『一橋大学国際教育センター紀要』 9 2018 年 pp47-58
- [6] 小柳かおる (2004) 『日本語教師のための新しい言語習得概論』 スリーエーネットワーク 2004 年窪園晴夫「モーラと音節の普遍性」 『音声研究』 (2) 日本音声学会 1998 年 pp5-15
- [7] 本橋美樹 (2018) 「ひらがな表記の特性と音声教育の関連性」 『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 2018 年
- [8] 大高博美・神谷厚徳 (2013) 「英語のリズムにおけるフットの等時性—等時性仮説の真偽検証—」 『言語と文化』 (16) 関西大学言語研究センター 2013 年 pp17-23
- [9] 土岐哲 (2004) 「日本語音声教育の新視点」 『バンコク日本文化センター日本語教育紀要』 (1) バンコク日本文化センター 2004 年 pp5-17
- [10] 樫永 真佐夫 (2017) 「交流史研究の新局面 : ベトナム語ローマ字表記をめぐって」 『民博通信』 (158) 国立民族学博物館 2017 年 pp28
- [11] 山下好孝 (2008) 「リズム単位を利用した発音指導 : 後ろ向きフットカウントの試み」 『北海道大学留学生センター紀要』 (11) 北海道大学留学生センター 2008 年 pp76-89
- [12] 国際交流基金 HP
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/vietnam.html>
2022 年 5 月 4 日閲覧
- [13] 2021 年度 海外日本語教育機関調査
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey21.html> 2023 年 6 月 26 日閲覧
- [14] 国際交流基金 HP
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/vietnam.html> 2022 年 5 月 4 日閲覧

A STUDY OF THE JAPANESE SOUND LECTURE FOR VIETNAMESE JAPANESE LEARNER: APPROACHING FROM COMPARATIVE LINGUISTICS OF LANGUAGE RHYTHM

Hisashi Sakata

ABSTRACT— This is a study of the Japanese sound for Vietnamese Japanese learners which is approaching from the positive transfer of foot language rhythm. It is important to teach the sound of Japanese (phonetics) to Vietnamese Japanese learners with some practical reasons, such as demonstrating Japanese language proficiency skills at job interviews, and a strong demand for Vietnamese those who want to seek better job opportunities. There are few existing studies on Japanese phonetics for Vietnamese learners of Japanese.

In fact, there are several common senses of the rhythm between Japanese and Vietnamese languages. For example, the values of the PVI (Pairwise Variability Index) are very close between Japanese and Vietnamese. Also both are separable by unites with two. In Vietnamese, the words are often made by two syllables because of Chinese-origin words (Hán ngữ), and some non-Chinese words which are replaced with Vietnamese-origin words from Chinese words. Meanwhile, the Japanese language forms foot-rhythm made by 2 moras also. Thus, it's possible to claim that Japanese and Vietnamese languages have similar rhythms. This study aims to create a new method to teach Japanese rhythm to Vietnamese Japanese learners by using positive language transfer of the Vietnamese language.